



COSSS report

Chuetsu Organization for Safe and Secure Society.

公益社団法人 中越防災安全推進機構 機関紙

2013 春

VOL. 3

「中越地震と向き合い、 地域の人々と向き合う組織」であり続ける



— I ターン留学 にいがたイナカレッジスタート—

contents

特集① P2-3 「防災教育の今」

学校現場で防災教育を展開するには

特集② P4 企画展「災害とこころのケア」

～こころの雪をとかそう～過去の教訓を東日本へ

【お知らせ】 P 5 公益社団法人として立脚します 【シリーズ】 P 6 「人と人」 椋澤 善一郎・砂川 祐次郎

【COSSS リレーエッセイ】 P 7 「復興とは何か」 復興デザインセンター長 稲垣 文彦

【連載】 コラム・視点防災 【その他】 インフォメーション、施設のご案内、会員募集



根知小学校での防災活動。
地域の大人を巻き込んだ活動が高評価につながった。

「防災教育チャレンジプランに応募した きっかけは？」

宮川 チャレンジプラン審査員に糸魚川市長（日本ジオパーク協会会長）がいたことが縁で、平成二十二年二月に応募することを決めた。その年度の大賞受賞者は金石東中学校。一か月後に発生した東日本大震災では無事に避難した話を聞き、防災教育に取り組む価値があり、やらなければいけないと強く思った。学校は災害時に避難所になり、地域住民も避難してくる。しかし、マニュアル通りにしただけで、学校だけの閉鎖された避難訓練をやっても意味はない。地域と学校が一緒になって、問題解決能力を培っていく必要があると思った。これが防災教育に本腰を入れようと思った原点。

「学校で防災教育を実施するのに必要なことは？」

藤岡 学習指導要領や新潟県地域防災計画との整合性のとれたプログラムであることが必要。学校で防災をテーマに取り組むには、教育と管理は完全に切ることはできず、先生自身がその必要性を感じなければならぬ。

宮川 安全担当に丸投げするのではなくて、管理職がやる気になることも必要。私は、防災士や防災危機管理者などの資格も取ったが、発災対応型の避難訓練や



宮川 高広
(みやがわ たかひろ)

糸魚川市立根知小学校教頭。2012年度防災教育チャレンジプランではアイデアの豊富さや子どもたちが楽しんで取り組んでいる点などが評価され、防災教育大賞を受賞。新潟県防災教育プログラム制作事業では土砂災害モデル校に指定されている。

図上訓練があることを知り、少なくとも子どもたちや地域の人にも理解してもらいたいこともわかってきた。防災士の資格も取っただけではだめで、経験を積みながら力にしていかなければならない。モチベーションを高めるために、具体的な目標を持たせることも必要。例えば、ぼうさい甲子園（※）で賞金を獲得したいという目標があれば、そのために何をしたらいいか、子どもも職員も戦略を考える。ただ必要だからやりなさい、では続かない。防災教育に取り組んでいる学校同士で、お互いの実践を情報交換するのもいいきっかけになる。情報交換するためにお互いに必死で勉強するし、交流したことも実績になる。

「教員に防災教育の必要性を理解してもらうには？」

藤岡 一つは、先生方に災害に関する知識を身につけさせ、先生方に興味関心を

持たせること。二つ目は、新学習指導要領で謳われている「生きる力」を身につける必要性があることを認識してもらうこと。これからの時代は、知識やスキルを詰め込みだけではなく、先行き不透明な時代の中で、子どもたちに考えさせ、判断して表現させる力が重要になる。そのためにもこういったプログラムを使えば、求められている力が身につく。この二つが一致しないとなかなか学校では進まない。

宮川 防災教育に本腰を入れて取り組むのと並行して、本校では、社会福祉の研究指定校にもなり、上越教育事務所が推進する「心プロジェクト」にも取り組まなければいけなくなった。この三つをバラバラに意識して取り組むと大変なので、三つのプロジェクトに共通する（「人や地域と」関わる）というキーワードを意識して実践した。自己肯定感を高め、生きがいを持って前向きに取り組む、という姿勢であれば、「社会福祉」、「心」

防災教育の今

- 学校現場で防災教育を展開するには -

新潟県教育委員会から努力事項に掲げられている学校現場での防災教育。どのように学校現場で取り組み、地域と連携して、子どもたちに「生きる力」を身につけてもらえばいいのか。新潟県防災教育プログラム制作事業でアドバイザーを務める上越教育大学大学院の藤岡達也教授と、2012年度内閣府主催の防災教育チャレンジプラン（※1）で大賞を受賞した、糸魚川市立根知小学校の宮川教頭先生に話をうかがった。



藤岡 達也
(ふじおか たつや)

上越教育大学大学院学校教育研究科教授、上越教育大学附属中学校校長。大阪府公立学校教員、大阪府教育委員会・大阪府教育センター指導主事を経て現職。新潟県防災教育プログラム制作事業アドバイザー。専攻は環境教育、科学教育、自然災害・防災教育等。

そして「防災」にもつながってくる。
藤岡 地域の良さを見つけ、新潟県の特徴を知り、地域に愛着を持てる子どもを育てるためのプログラムであれば、先生も「これはおもしろい。総合学習でやってみよう」という話になる。いろいろな災害があるが、だからこそ自然に恵まれて、お米もおいしいのだと。逆にここを使える土地にするために昔の人は、どれだけ治水と利水にエネルギーをかけてきたか、という新潟県流のプログラムもできるのではないかと。既存教科との関連も重要。小学校六年生では地震や火山を取り扱うし、小学校五年生では河川の働きをやる。具体的な教材とタイアップしないと、先生方はとまどってしまう。子どもたちの「生きる力」を身につけていく、そのためにこういう教育活動を展開する、そして新潟県という地域を知って、地域の魅力を発信できる力になる、といったねらいや目的があれば、この取り組みの意味もわかる。防災教育だけを独

立させて考えるのではなく、様々な取り組みの中で、連動させて考えるようにしてもらえれば、学校現場でも取り組みやすいだろう。
インタビューを終えて
根知小学校の大賞受賞は、アイデアが豊富であり、実効性のある訓練を子どもが楽しんで学べる点、学校をあげた組織的な活動であり、継続性が期待できる点、他校への波及が見られる点、保護者・地域を取り込んだ防災レベルの向上につながっている点が高く評価されたことが主な理由である。藤岡教授の話にもあるように「生きる力」を育むというねらいを持ち、既存教科とのタイアップや、教科を横断させ、学校行事と関連させていくことが必要である。防災教育では、主體的な判断力や、他人を思いやる心、他人とともに協調する力を養うことが期待されている。これが防災教育で身につけ



バケツリレーや土のうづくりなど、体験活動を多く取り入れている。子どもたち自らが楽しんで取り組んでいるのが特徴。

※1 ■防災教育チャレンジプラン

内閣府主催の、全国の地域や学校で防災教育を推進する為の促進事業。応募の中から選ばれたプランから優秀な実践活動に対して防災教育大賞、防災教育優秀賞、防災教育特別賞が与えられる。

※2 ■ぼうさい甲子園

阪神・淡路大震災の経験や、その後の様々な自然災害から得た教訓を生かすべく兵庫県等が主催している小・中・高・大学生向けの防災活動促進事業。グランプリには賞金40万円が与えられる。

い、いわゆる「生きる力」となる。教室内の座学だけではなく、キャンプや修学旅行などで、体験活動を多く取り入れることで、子どもたちの力が総合的に培われる。学校だけではなく、保護者、地域、教育委員会等と協力体制を築き、地域全体で子どもたちの「生きる力」を育むことができるよう、今後も学校や地域に寄り添った支援をしていきたい。
(地域防災力センター 関谷 央子)

特集②企画展「災害とこころのケア」 ～こころの雪をとかそう～



各こころのケアセンターによる活動報告の様子。



交流会終了後も意見交換は続いた。



石巻市議会の視察にあわせ、パネルの解説が行われた。



交流会では少人数ながら濃密な意見が交わされた。



兵庫県こころのケアセンター
センター長 加藤寛氏



龍谷大学短期大学部社会福祉学科
准教授 黒川雅代子氏



小千谷市 保健師 佐藤久美氏

過去の教訓を東日本へ

二月八日から三月二十九日にかけて、企画展「災害とこころのケア」が長岡震災アーカイブセンターきおくみらいを会場に開催された。本企画展は、新潟県精神保健福祉協会こころのケアセンターとの連携企画展であり、期間中、こころのケアセンター職員によるパネルの説明や、阪神淡路大震災よりこころのケアに携わってきた講師を招いての講演会、中越地震当時から現在までこころのケアセンターと共に活動されてきた保健師や岩手・宮城・福島各こころのケアセンター職員を囲んでの交流会が開かれ、支援関係者や一般市民など、延べ八十六名が参加した。

三月三日の講演会では、加藤寛氏より、復興期の支援のあり方についての講演が行われ、同二十四日の講演会では黒川雅代子氏より、災害による喪失を体験した人をどう支えるのかについての講演が行われた。

交流会では東北三県の各こころのケアセンター職員より、活動状況や気になる事などのトピックが紹介され、活発な意見交換がなされた。中越地震発災当時より小千谷の保健師として従事されている佐藤久美氏からは「中越地震の二年後は、仮設のその後が見え始めてきた時期だっ

たと同時に、支援者は心を壊し始める時期だった。東北では支援者同士交流する場を持ち、息の長い支援に努めてほしい」など支援の経験に基づいたミニ講話があり、それを受け参加者からは「支援者支援の必要性を再認識した。これからの活動に生かしたい」「世間は復興ブームだが、現場では先が見えず言葉だけが上滑りしている。地域が復興しない限り個人も復興しない」という佐藤保健師の言葉に深く頷いた」などの感想が寄せられた。

中越地震以降八年間活動を続けてきた新潟県精神保健福祉協会こころのケアセンターは併機構と同じ中越大震災復興基金により設立された団体で、発災から十年の平成二十六年に活動期限を迎える。今回は、その活動を紹介すると同時に、災害後のこころのケアについて、参加者と共に考え、中越の冬を少しでも過ぎやすくすることを目的とした企画展だったが、一般市民、専門家、被災者、支援者などさまざまな立場の方に関わっていただくことで、目的以上の実りある企画展となった。

長岡震災アーカイブセンターでは今後とも、こころのケアセンターをはじめとしたさまざまな復興支援団体と連携し、全国に向けて中越の今をお伝えする情報を発信し続けたい。

(長岡震災アーカイブセンター 松井 千明)

中越防災安全推進機構は

2013年4月1日より

公益社団法人

として立脚します。

公益社団法人制度改革

平成二十年十二月より公益法人制度改革がはじまり、公益社団法人として立脚するために申請手続きを進めていた中越防災安全推進機構は、この四月一日より公益法人として認定され、晴れて「公益社団法人中越防災安全推進機構」としてスタートを切る。この間、中越防災安全推進機構が実施する事業が、真に公益（公共の利益）を目的としたものであるか、同時に、適切な組織運営体制などの諸条件を満たしているかなどについて客観的な審査を受けてきた。結果、この度の公益社団法人認定である。

中越防災安全推進機構は、長岡市に所在する三大学（長岡技術科学大学・長岡造形大学・長岡大学）一高専（長岡工業高等専門学校）一研究所（独立行政法人防災科学技術研究所雪氷防災センター）で組まれた防災安全コンソーシアムを母体として平成十八年九月に設立された。以来、新潟県中越地域の教育・研究機関の集積を生かした産官学民のネットワークによって中越地震からの復旧・復興活動を支援・推進するとともに、被災・復興に関する調査研究活動を蓄積・発信し、安全で活力ある地域づくりの推進や強靱な国土づくりに寄与することを目的に活動を展開してきた。公益社団法人となっ

た今、この役割と使命を達成するために、より一層の地域貢献・社会貢献を任として活動してゆく。

公益法人に対する寄付優遇

公益法人は公益事業によって利益を得ることは基本的に認められない。これまでであった、建前は公益事業だが実質的な営利事業という団体は、この公益法人認定を受けられない。また、収益事業の費用は公益事業の費用を超えてはいけない。必然的に公益事業が組織活動の中心となり、公益事業の実施が主目的であることが要求される。こういった事情から、公益事業を健全に実施していても、収益を得る事に対して制限が多く、公益事業の実施や組織維持に必要となる資金を得ることが難しくなる。

しかし、公益法人に対する優遇措置が受けられる。

一つは公益法人に対する法人税の優遇措置である。これは公益目的事業には課税がなく、収益事業であっても公益目的であれば課税がない。さらに収益事業の利益を公益事業への振り分け（寄付）が可能となり、残った収益額にのみ課税される。

今一つは、公益法人に対する寄付行為である。個人の場合は公益法人に対して寄付をした場合、寄付金控除を受ける事

ができるようになる。法人の場合は、公益法人への寄付の額を損金として計上できるため、その法人の法人税が下がる。公益社団法人中越防災安全推進機構は、中越地震の教訓と知見を活かして、減災社会の実現に向けて寄付すべく活動を展開してゆく。また、災害復興・中山間地域振興の支援活動を展開してゆく。ご賛同頂ける皆さんのご理解とご協力をお願いしたい。

（事務局長 山口 壽道）

①個人からの寄附

1. 所得控除

すべての公益社団・財団法人への寄附が対象となる税制優遇措置

2. 税額控除

一定の要件（PST要件）を満たしていることの証明を受けた公益社団・財団法人への寄附が対象となる税制優遇措置（1. 所得控除との選択適用）

②法人（民間企業等）からの寄附

法人からすべての公益社団・財団法人へ支出された寄附金について、所得金額や資本金額等から算出される一定額を限度として、損金算入すること（損金算入の分だけ、課税対象額が減少します。）ができます。

（公益法人 information より転載）

シリーズ 人と人

最初は、砂川さんが来る
ことが決まっても、集落の
皆さんはあまり関心がな
かった。でも、マップが出
来るにつれて反応が変わっ
ていってね。今となっては、
マップは集落の宝だ。原本
は額に入れて村の鎮守様に
飾っているし、その他にも
集落のカレンダーに使った
りしている。

この先、集落が無くなっ
ても何とか後世に伝えたい
と思っていた矢先のマップ
づくりだったから運命だど
思ったね。

砂川さんは、最初は不
思議な人だと思ったけど、
付き合いしていく内に信頼
できる人だと分った。お互
い口がたっしゃで正直者。
上辺だけで世間を渡ってきた
人じゃないね。だから、今
日までつながっているんだ
と思う。

死ぬまでに砂川さんの集
落にぜひ一度行ってみたい
ね。砂川さんの書いている
「ぼちぼち竹田」も気になる
し。それと砂川さんになん
らかの形で恩返ししたいね。

「集落を描くことから
始まったつながり」

椋澤 善一郎

栃尾半蔵金集落生まれ。

半蔵金集落区長。

中越地震以降から地域リー
ダーとして活躍し、ボランティ
アの受け入れなどを行う。

先代から受け継いだ土地で
農業を営む傍ら「半蔵金集
落」を後世に伝えるために
昔の写真展など企画する。

砂川 祐次郎

埼玉県川口市生まれ。

竹田元気づくり会議代表。

15年前に長岡市川口竹田

集落に移住。LIMO通信

の表紙イラストや、竹田集

落の情報誌「ぼちぼちたけ

だ」の発行、「竹田かんじき

ウォーク」の企画運営など

活動は多岐にわたる。

半蔵金に通うようになって
きたきっかけは、「かりやだ交
流会」。この会の中に「プレ
ゼント交換企画」があって、
僕は絵が得意なので集落の
イラストマップづくりを賞
品にしたんです。そこでた
またま当たったのが椋澤さ
んの住む半蔵金集落でした。

マップ作成が始まってから
はとにかくスケッチブック
を片手に何度も通いました。
冬には雪が多すぎてあきら
めることもありましたが。

でも、通っているうちに集
落の人が声を掛けてくれた
り、お茶をごちそうしてく
れたり、いい関係が築け
ました。おかげで今でもイ
ラストマップの事と関係な
しにたまに遊びに来ていま
す。

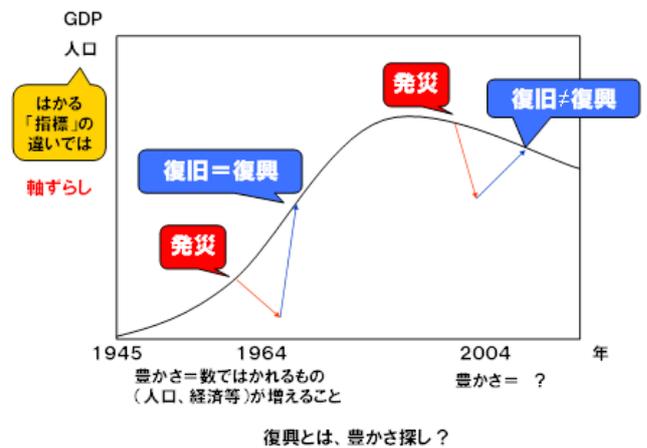
椋澤さんに出会って集落
の人の内から出るパワーの
大事さを改めて感じました。
集落に暮らし続ける覚悟が
できている人が出ず雰囲気
は違いますね。

これからも、来れる範囲
で集落の行事などに通いつ
つ続けたいですね。そしてま
たイラストが描けたらいいで
すね。

「復興とは何か」 復興デザインセンター長 稲垣 文彦

「復興とは何か」、中越地震（平成十六年）以降、この問いに悩まされ続けている。東日本大震災から二年が経過した。被災地の誰しもが復興に向け努力しているが、努力すればするほど「復興とは何か」という問いに悩まされる。そこで、ここでは読者の皆さんとともに「復興とは何か」を考えてみたい。

「復興」の明快な定義はない。ただ一般的には「災害前に比べ良くなったと思うこと」という感覚（復興感）があるだろう。ここで思考実験を試みよう。縦軸にGDP（国内総生産）あるいは人口をとってみる。そして横軸に時間をとってみる。昭和二十年を起点とすると概ね図のような曲線を描くことができるだろう。さて、ここからが本番。新潟地震（昭和三十九年）をイメージしよう。災害で様々なものを失った。その失ったものを元にもどす。この時代は「右肩上がり」すなわち、世の中勝手に良くなっていった。この時代は「復旧≠復興」、失ったものさえ元に戻せば「災害前に比べ良くなったと思うこと」ができた。時代は多少違うが「いつかはクラウン」というCMがあった。頑張ればいつかはクラウンに乗れるという内容だったように記憶している。この時代、どの家庭にもそんな夢があった。次に、中越地震。災害で様々なものを失った。その失ったものを元にもどす。この時代は「右肩下がり」



すなわち、世の中勝手に良くなってはくれない。この時代は「復旧≠復興」、失ったものを元に戻すだけではいつまでたっても「災害前に比べ良くなったと思うこと」ができない。ここで「復興とは何か」がわからなくなってきた。「復興とは何か」を悩むなかで、はたと気付いた、そうだ「はかる指標が違う」のでは。従来の指標ではいつまでたっても復興できない。右肩上がりをするにも無理があるのはご承知だろう。ここから復興するためには「軸（指標）をずらす」ことが必要なのだと思付いた。次に、軸をどこにずらせば良いのかという疑問がわいてくる。

右肩上がりの時代は、豊かさ「数ではかるもの（人口、経済等）が増えること」だったのでなからうか。さて、右肩下がりの時代は、豊かさ「？」（まだ探せていない）、すなわち、軸をずらす先を探せていないのだ。ここから「復興とは何か」の問いが生まれてくるのだろう。その意味で、復興とは「豊かささがし」と表現できるかもしれない。先日見たCMで、ピンクのクラウンに乗っていた北野武がトンネルの出口の手前で「あつ出口だ」といった後に、ジャン・レノが「入口だよ、未来の」といつていた。東日本大震災の復興は、辛い災害の出口ではなく、未来の入口かもしれない。



【Iターン留学 にいがたイナカレッジがスタートします！】



にいがたイナカレッジとは…

農村の現場で、そこに住むに住民の人たちと一緒に汗を流しながら学ぶ

「**実地研修**」

中越地震を機に活発になった“地域づくり活動”の知識や経験を体系的に学ぶ

「**講義研修**」

この2つのプログラムを組み合わせ、参加者自身が、農村の現場に1年間Iターンして、その地域での暮らしを通して、農村での自分にあったライフスタイルを見つける・創り上げていくプログラムです。

詳細は、復興デザインセンターのHPをご覧ください。(http://www.fukkou-dc.jp/)

【防災活動事例発表会が行われました！】

3月24日(日)長岡市内で先進的な防災活動を紹介する「防災活動事例発表会」が行われました。発表会には200名超の市内自主防災関係者の方々が聴講され、自分たちの地域で活かせる自主防災活動のヒントを得ようと熱心に聴講されました。



「コラム・視点防災」

【わりと起りうる非常事態】

前号のコラムで、普段使うものを多めに用意して、消費しながら補填していく「ローリングストック法」という災害用食料の備蓄方法をご紹介しました。その時はなるほどなと思いながら読んでいたのですが、今回はその方法を身をもってお勧めしたい事件が起こりました。

非常食というと、災害時の食料を思い浮かべがちですが、この「非常」というのは何も災害だけではなく、一人暮らし

をしたことのある方であれば一度は経験したことがあるであろう「非常事態」。そうです、病気で寝込んだときです。風邪の引き始めであればまだ対策は出来ますが、熱が出てしまうともう一歩も動きたくなくなりますよね。そんな時に普段からの備えが大事になってきます。風邪薬・スポーツドリンク・簡単に調理ができ、弱った体でも吸収しやすい食品などなど、寝込んだ時のための備えと災害の備えは重なる部分があります。そう考えると非常食の備蓄が活躍する場面は普段から散りばめられているんですね。ダウンして動けなくなる前に、今日からでも始めてみませんか。



(長岡震災アーカイブセンター 松井 千明)

会員募集中!

当機構では私たちを応援してくれる会員を募集しています。
 地域防災への取り組みや被災地への支援活動に賛同し、応援いただける会員を募集しています。
 正会員：年会費5,000円/年
 団体賛助会員：100,000円/年
 個人賛助会員：3,000円/年
 ※申込書は当機構ホームページよりダウンロードできます。

公益社団法人 中越防災安全推進機構 機関紙 <COSSS report> 第3号 2013年4月発行

発行人：山口壽道 編集：関谷央子 日野正基 松井千明 制作・デザイン：日野正基
 〒940-0062 新潟県長岡市大手通り2-6 フェニックス大手イースト2F 長岡震災アーカイブセンター-きおくみらい内
 TEL:0258-39-5525 FAX:0258-39-5526
 E-mail:info@c-bosai-anzen-kikou.jp http://c-bosai-anzen-kikou.jp/

施設のご案内

長岡震災アーカイブセンター
きおくみらい

【住所】
 〒940-0062
 新潟県長岡市大手通2-6
 フェニックス大手イースト2階
 【開館時間】
 【入館無料】10:00～18:00
 【休館日】
 毎週火曜日 年末年始
 【TEL】
 0258-39-5525
 【FAX】
 0258-39-5526
 【e-mail】
 kiokumirai@cosss.jp

おぢや震災ミュージアム
そなえ館

【住所】
 〒947-0026
 新潟県小千谷市上ノ山4-4-2
 小千谷市民学習センター「楽集館」2階
 【開館時間】
 【入館無料】9:00～17:00
 【休館日】
 毎週水曜日 年末年始
 【TEL】
 0258-89-7480
 【FAX】
 0258-89-7485
 【e-mail】
 sonae@cosss.jp

川口きずな館

【住所】
 〒949-7503
 新潟県長岡市川口中山144-1
 川口運動公園内
 【開館時間】
 【入館無料】10:00～17:00
 【休館日】
 毎週火曜日 年末年始
 【TEL】
 0258-89-3620
 【FAX】
 0258-89-3621
 【e-mail】
 kawaguchi-info@cosss.jp

ながおか市民防災センター

【住所】
 〒940-0082
 新潟県長岡市千歳1-3-85
 ながおか市民防災センター2階
 【開館時間】
 【入館無料】9:00～18:00
 【休館日】
 年末年始
 【TEL】
 0258-36-8141
 【FAX】
 0258-86-7789
 【e-mail】
 info@c-bosai-anzen-kikou.jp

やまこし復興交流館
準備室

【住所】
 〒940-0204
 新潟県長岡市山古志竹沢甲1377
 山の学校(通称ロータリーハウス)
 【TEL】
 0258-41-1203
 【FAX】
 0258-41-1204
 【e-mail】
 memorial@cosss.jp